

解説

ルーズハウジングについて(1)

酪試小谷恂一

はじめに

最近、酪農の経営規模は多頭飼育の方向へ進んで来ている。1、2頭飼いでは、経営的にもあまりプラスになっていないのであるが、だからといって、頭数を増加させることが、酪農経営を有利にすると考えるのは早計である。立地条件、家族労働力、資金等によって、その頭数もおのずから定まって来るものである。しかし、少頭飼育は今後の酪農家にとってのべき道ではない。各地で行なわれている協同経営も、その立地条件、労働力、資金によって、有利に展開しつつあるが近年特に注目されるようになった、乳牛の飼育管理の方式に、ルーズハウジングシステム（放飼式又は追い込み式）がある。これは乳牛の多頭飼育方式が進んでいる欧米で、飼育労働力の能率化のために、多く取りあげられて来たものである。

種類と特徴

この方式は別に変わった飼い方ではないが、今までのスタンション方式やつなぎ方式と異なり、牛の思うままに自由にさせるという方式である。このルーズハウジングシステムは、大きく分けて、4つの部分から構成されている。すなわち（1）ローフィングバーン（休息牛舎）、（2）フィードエリア（飼料場）、（3）ペーブドベーンヤード（舗装中庭）、（4）ミルクングパーラー（搾乳場）である。ルーズハウジングシステムの利点と欠点をあげて見ると次のとおりである。

利点（1）牛舎の建築費が安い、すなわち、多くの牛を飼う場合、1頭当りの建築費が安上がりである。（2）飼料管理労力が、機械化されることによって大幅に節約ができる。すなわち1頭当りの人手が少なくてすむ。（3）牛の衛生管理が容易である、すなわち発情の発見が容易である。（4）頭数の増減に比較的制約されない。すなわち少し位増加しても直ちに入れることができる。（5）牛が自由に行動できる。

欠点（1）個々の牛への注意が不足がちで、外傷

等の発見が遅れやすくなる。（2）粗飼料を豊富に必要とする。（3）敷わらを多く必要とする。

またこのルーズハウジングシステムも搾乳場の方式によって大体つぎの2つに分けることができる。すなわちタンデム型（縦列型）とヘリンボーン型（鯡骨型）とがあり、大頭数ではヘリンボーン型が多くとり入れられている。この2つの型について少し書いて見る。

タンデム型

牛が縦に並ぶために、牛房の数を増すと搾乳場が長くなり、作業員の歩く距離が長くなるので、単式のものには3頭入れ、複式のものには6頭入れが限界であろう。

タンデム型は第1図のようなものがある。

ヘリンボーン型

この型の特徴は牛房間のしきりがなく、ジグザグ条の横棒により牛の位置がきまり、牛をグループとしてとりあつかうことができる。又牛の配列が作業員の通路に対して、30～45度の角度で斜めになっているので、タンデム型に比べて牛房間隔が少なくなり、作業員の歩行距離が短く、搾乳能率も増加する。

ヘリンボーン型は第2図のようなものがある。（続）

